

後記

河野武司先生は、二〇二四年三月末日をもつて、慶應義塾大学法学部を定年退職される。二〇〇四年四月に杏林大学から転任されて以来、ちょうど二〇年の節目である。私が法学部政治学科に入学したのが二〇〇六年四月のことなので、河野先生の慶應義塾での教員生活の多くの期間中、学部生、大学院生、そして同僚という異なる立場において、ご指導を賜ることができたのは私にとって幸いであった。

私が河野先生をはじめてお見かけしたのは、今も開講されている学部の「現代政治理論」の授業においてであったと思う。この授業では、シュンペーターやダウニズムの民主主義理論を簡潔明瞭に講義なさっていたのが印象的で、大変参考になつた。大学院の「公共政策論」の授業でも、当時話題になつていたウイットマンの民主主義の効率性論に対するカプランの批判について講義を受けたことを記憶している。このように河野先生は代議制民主主義における市民の情報の非対称性の問題に強く一貫した関心をお持ちで

あり、それゆえ学生の研究に対して助言される機会にも、研究の頃末な論点は固より、その背後にあるべき首尾一貫した問題意識を問われることが多かつた。私自身つい先頃、「君の研究対象は便宜的な理由によつて選んだものなのか、今後何を明らかにしていくつもりなのか」と手厳しい指摘を頂いたばかりである。

一方、河野先生は学生思いの教員であられた。私は河野先生と直接の指導関係になかったが、大学院の授業後とときどき他の院生を連れて飲みに誘つて頂いた。学会やシンポジウムの懇親会の場でも、気さくに声をかけて頂いたことが思い返される。何より、政治理論部門で共に働かせて頂くようになつてからは、その担当授業の数に驚かされた。正確な数は承知していないが、近年は学部、大学院、通信教育部、法務研究科で、あわせて二〇近い授業を開講されていたと思われる。私が授業負担のあり方に疑問を呈すると、「学生に教えるのは楽しいから負担ではない」と笑われていた。本論文集には、そのような河野先生のお人柄を慕う多くの先生方から寄稿された論文が所収されている。

四月からは大学での教育・研究を継続されるとお聞きしている。お身体には気をつけて、河野先生が引き続き大学の教室で楽しい時間をお過ごしにならることを祈念して、

本論文集を上梓させて頂く次第である。

二〇二四年一月

法学部准教授 築山宏樹